

市民の集う海岸林「万里の松原」とともに22年

三浦武¹

¹万里の松原に親しむ会 会長

この度は、日本海岸林学会地域賞を頂き光栄に思います。この名誉ある受賞は、私たちの今後の活動に大きな励みとなります。ありがとうございます御座いました。

1 はじめに

庄内海岸林は、遊佐町吹浦から鶴岡市湯野浜まで33 km、幅1.5~3 km、海岸林面積は約2,300 haあり広大である。先人が築いた林齢200年を超す林分も多く、この防風林に囲まれた砂丘地は、地下水も豊富で農産物や果樹などの砂丘地農業が盛んである。

「万里の松原」は酒田市北部に位置し、1991年から1994年にかけて旧酒田営林署と酒田市が「生活環境保全林整備事業」として整備した134 ha（北の森・南の森）の地域で、当会の活動拠点は約60 haの南の森である。特にこの地域は多くの先人達が汗を流した地域で、「歴史とみどりの多い地域」である。

2 当会結成と組織の現状などについて

2001年に30人ほどの会員で立ち上げたこの会が、「仲間づくりの方策」や「活動の知識と技術」、「活動資金」など多くの課題から学んだ「楽しく・生きがい・継続」を目標に、「会員交流と赤帽」で仲間がつながりながら活動を続け、現在は団体会員14団体、個人会員97名を数えるまでに成長できた。

活動面では、万里の松原の整備や子供たちとの協働など幅広く実施し、多方面から評価と期待を頂いているが、これらは庄内砂丘の海岸林に関わる関係機関や団体で組織する「出羽庄内公益の森づくりを考える会」による「リーダー研修会」など様々な研修の機会、各種助成金による支援、そして「フォレストパル」の建設等、私たちの足りないところを補う多くの助けがあつてのことである。

3 市民の集う海岸林「万里の松原」とともに22年

フォレストパルを拠点にした活動は、4月の「奥の細道古道（会結成10周年で整備）」の保守から始まり、つつじ等花木類の剪定、受託事業の下刈り、その他林内整備などが12月初旬まで続く地域貢献活動となっている。

万里の松原に集う市民は、ウォーキングや自然観察、野外での食事会など健康づくりや憩いの時を過ごすために訪れており、整備された空間を楽しんでいることが、フォレストパル内に市民が書いてくれている「お便り」の記載内容からうかがい知れる。

また、フォレストパルの前面に設置した掲示板や施設内の壁には、万里の松原の自然や植物、歴史などの写真や資料を掲示して市民への情報発信にも努

めている。

4 教育機関と連携した海岸林学習

学校との連携では、保育園児や小学生との自然観察や海岸林の学習、小・中・高校生とのクロマツの枝打ちや除伐、松原整備などが継続的に実施されている。海岸林体験学習を経験した次代を担う児童・生徒たちが毎年卒業していくことに意味があることと考えている。

また、この活動は会員自身も元気をもらい、生きがいを感じる大切な活動になっている。

5 震災直後から始まった「万里の森」づくり

2011年3月11日の東日本大震災は東北の太平洋岸に未曾有の被害をもたらし、海岸林も壊滅状態であった。直後の総会において女性会員から「復興支援活動に参加しよう。海岸林の活動をしている自分たちにも学ぶことがあると思う」との意見が出され、ここから「万里の森」づくりが始まった。翌2012年6月に「津波と海岸林」をテーマにした会員研修、10月には仙台荒浜被災地視察研修を実施。現地の海岸防災林を見たことにより参加意識が高まり、その後の活動に生かされた。

2013年4月10日には「万里の森」での植栽が実施され、以降毎年春と秋に保育のための荒浜行きが続いた。

2021年には多くの成果を得て10年間の長い活動が終わった。クロマツの成長は場所により差があるが、樹高1.2 m~4.4 m（平均2.2 m）、100%活着（2020年10月調査）であった。多くの成果の中で、庄内から子どもたちや地域の人達延べ600名が荒浜に行き、被災の状況や復興への努力を目の当たりにできたことは、特筆できる。

6 会員と地域をつなぐ広報誌「短信まつば」

2007年創刊の月刊「短信まつば」は、担当者のきめ細かな取材と適切な編集により、万里の松原の状況や活動内容を分かりやすく発信し、会員と地域を繋ぐ「貴重な財産」になっており、この12月で200号を達成する。

7 課題は高齢化と活動推進体制強化

結成から22年。高齢化と後継者問題に直面している。予想はできていたが、急速に進むこの課題を受け止めながら、活動のあり方を再検討していく必要に迫られている。